

海を救ったリュウ

宇検村立久志中学校 二年 野上田 一兵

ティダ大島に住むリュウキュウアユのリュウは、この島で一番美しいと言われている川に住んでいる。リュウキュウアユは大きくなると、一度海へ旅に出る。そして数年後、また川へ帰ってくるのだ。この春、いよいよリュウが旅に出る番がやってきた。

「海には、きれいな熱帯魚たちが住んでいるんだよ。それに、サンゴ礁でできた高いビルもあるんだよ。すごくきれいなところさ。」

エビおじいやザリガニおばあから、そんなふうには海の話聞いていたリュウは、（早く海で暮らしたいな）と毎日思っていた。

リュウが海へ旅立つ日がやってきた。かばんに道具を詰め込んで、みんなに別れを言う。

「今までありがとう。僕は海に行つて、いろんなことを学んで帰ってくるよ。」

リュウはそう笑顔で言うのと、後ろを振り返ることなく勢いよく泳いで行つた。学校や、友達の家の前を、どんどん泳いでいく。いろんな思い出が、リュウの頭に浮かぶ。リュウの目から涙がこぼれた。そして何日か過ぎた

ころ、リュウはついに川と海の境目まできた。（ここで本当にみんなとはお別れなんだ、さようなら、僕、がんばるよ。）そう心の中でつぶやき、涙を拭いた。

海の中へゆっくり入っていく。住み慣れた川とはまるで景色が違う。見たこともない世界だった。しかし、進めば進むほど、何かがおかしいことに気がついた。おじい、おばあから聞いていた海とは、ようすが違うのだ。（あれ、きれいな魚たちはどこにいるんだ。サンゴ礁でできた高いビルも見当たらない。道を間違えたかな。）そう思ったとき、岩の門に「サンゴアパート」と書かれた建物を見つけた。僕が住むことになっているアパートだ。リュウは嬉しくなった。でも、聞いていたものとは違う、ボロボロで汚れた建物だった。

「すみません、誰かいませんか。」

と大きな声で言ってみた。すると、アパートの管理魚であるクマノミが出てきた。

「リュウくんかな。よくきたね。疲れただろう。でも、ごめんよ、この海はもう、昔の海とは違う。大きなクジラが海を荒らしていて、今は住むことが難しい。だから川へお帰り。」

予想もしなかった言葉に、リュウは驚いた。

「そんな、僕ずっと楽しみにしていたんだ。僕、そのクジラを見てくるよ。」

「だめだ。クジラに近づくのは危険だ。クジラのせいで、今までたくさんの生き物たちが命を落としたんだ。近づくんじやない。」

とクマノミは言った。サンゴアパートに住むほかの魚たちも口をそろえてそう言った。しかし、みんなの言葉を聞き入れることなく、リュウはアパートを飛び出していった。

どこにいるんだ、クジラは。岩にぶつかったり、海藻に体をぐるぐる巻きにされたりしながら、慣れない海の中を、クジラを探して泳ぎ回った。リュウの身体はもう傷だらけだ。(やっぱり、クマノミの言うとおりに、おとなしく川へ帰ったほうがいいのかな...) と思ったときだった。グオン、ガアンと大きな音が聞こえた。リュウは、音が聞こえるほうへむかっていた。目の前に現れたのは、見たこともない大きなクジラだった。クジラは、きれいなサンゴ礁の建物を壊そうとしていた。

「やめるんだ、どうしてそんなことをする。君だって海の生き物だし、仲間じやないか。」

「うるさい。お前になんか関係ない。」

ななめにつり上がった黒い目がリュウをにらみつけた。そして、大きな尾で、身体を蹴られてしまった。リュウは遠くまで飛ばされ、気を失ってしまった。リュウは意識がもうろうとする中、いろんなことを思い出した。大

好きな川で仲間と楽しく遊んだこと。学校のこと、旅の途中で初めてみた生き物や、景色。リュウの身体はもうボロボロだった。そのとき、

「やめろっ、なんだ、離せ、このやろう。」

とどこかで大きな声があった。残った力をふりしぼり、そつと岩の陰からのぞくと、あのクジラが海底でもがいているのが見えた。クジラが網にかかっている。人間の網だ。「人間の釣り糸や網には気を付けなさい。」とエビおじいに言われたことを思い出した。(もし、このままクジラが人間の網に捕まっていなくなってしまうえば、この海は、元通りのきれいな海に戻るかもしれない...) リュウは思った。しかし、リュウは、なぜクジラが海の中をこんなふうにしてしまったのか、どうしても知りたかった。クジラが理由もなく仲間たちを傷つけるはずがないと思ったからだ。今ならクジラが話を聞いてくれるかもしれないと思っただけだ。リュウは、そつと近づいた。

「クジラさん、どうして海をこんなふうにしてしまったんだ。海に住む仲間はみんな家族みたいなもんじやないか。なぜ建物を壊したり、仲間を傷つけたりするんだ。」するとクジラは、小さく、涙声で答えた。

「：俺は、ただ、仲間を守りたかったんだ。昔の海を取り戻したかっただけなんだ。人間たちが僕らの大切な仲間を奪い、サンゴのすみかまでめちやくちやにしてしま

った。人間が出したゴミが生き物を傷つけ、海を汚す。それなら、こちらが先に海を破壊してしまえば、人間は生き物をむやみにとったり、海を荒らしたりすることも無いと思っただんだ。」

「そうだったのか。クジラさんは海を守りたかったんだね。みんなで方法を考えよう。」

クジラの答えを聞いたリュウは、そう言うのと網を一生懸命かみちぎった。しかし、網はとても太く、噛んでも噛んでも切れなかった。クジラは絡まった網のせいで息がしづらくなり、苦しそうだ。もうだめかもしれない：リュウがあきらめかけたそのとき、その様子を静かに見ていた魚たちが集まってきて、手伝い始めた。やつのことでクジラを網から出すことができた。クジラはみんなに謝った。

「みんなありがとう。それから、ごめんなさい。僕は間違っていたのかもしれない。」

それからリュウたちは何日も話し合った。そしてリュウたちが出した結論は：

「この場所からみんな出ていこう。僕らが姿を消せば、人間だって考えるさ。少しだけ、ほんの少しだけ、ここを離れるんだ。人間は考える生き物だし、心というものがあるらしい。それを信じよう。きっと大丈夫。」

そうして、全ての魚たちはいなくなった。

それから、人間たちは生き物が一匹もいなくなった海を見つめながら考えた。これは、今までも罰だ。反省した人間たちは海を大切にしたい。汚い水を流すのをやめ、サンゴの再生に取り組んだ、海は日に日にきれいになった。

リュウはこの日を待っていた。サンゴアパートがあった海がきれいになっていった。そして徐々にみんなは海に戻ってきた。海の危機を救ったリュウは、みんなから感謝された。それからリュウたちは、きれいな海で仲良く暮らした。もちろん、クジラも一緒に。